

☆「戻っておいで」心の支えに 島旅作家の河田さん、
「生きる喜び」伝える 奄美看護福祉専門学校

(南海日日新聞)・Yahoo!ニュース 2017年12月9日

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20171209-00010003-nankainn-146>

> 東京在住の島旅作家・写真家の河田真智子さん(64)が8日、鹿児島県奄美市名瀬の奄美看護福祉専門学校(向井奉文校長)で講演した。学生たちは、障がいのある娘を育てながら働き、同じような境遇にある母親のネットワークづくりに尽力してきた河田さんの講話に聞き入り、命や家族、支え合って生きることの大切さを痛感した。

河田さんは、写真集「生きる喜び」(自費出版)の写真を紹介しながら講話を展開した。被写体は障がいのある娘、夏帆さん(30)で、25歳までの姿を撮影した。夏帆さんは仮死状態で生まれ、「点頭てんかん(ウエスト症候群)」と診断され、今も重度の身体、知的障がいがある。

講演で、河田さんは沖永良部島、奄美大島、加計呂麻島、バリ島など旅先での夏帆さんや七五三、成人式での夏帆さんの晴れ着姿の写真を交え、思い出話などを紹介した。

河田さんは19歳から、沖永良部島に通い続けている。35歳のとき、最後かもしれないと思い、1歳8カ月の夏帆さんを連れて行った際、「島の仲間に『お帰り』と出迎えられ、『つらいときはいつでも戻っておいで』と言われたことが今でも心の支えになっている」と話した。

「夏帆が5歳のとき、加計呂麻島まで旅した。誰にも手を借りないようにと試みたけれど、結局多くの人に助けられた。知人から『人脈という足もある』と諭され、力を抜いて子育てできるようになった」などと語った。

河田さんは近所の保育園職員に声を掛けられたのがきっかけで、保育所が行政に働き掛けてその保育園に通うことになったこと、1991年から8年間、障がい児を育てながら仕事をする母親のネットワーク「マザー・アンド・マザー」を主宰していたことにも触れ、「夏帆の通学やりハビリ、手術などの体験にいずれも仲間がいて、一つ一つ乗り越えてきた」と話した。

看護学科とこども・かいご福祉学科の学生計67人が聴講した。3年の女子学生(29)は「夏帆さんはたくさんの人に愛されて命をつないできたんだなと感じた。河田さんが仕事をしながら夏帆さんを育てることへの理解を、保育や教育施設、地域社会に広げていくのには苦悩があったと思う。看護師になる前に話を聞いてよかった」と話した。

…などと伝えていきます。

